場面	1　幼い太一の夢と父の死	2　与吉じいさへの弟子入りとじいさの教え	3　太一の成長と与吉じいさの死	4　母のおそれと父の海にもぐる太一	5　ついに瀬の主と対峙した太一	6　太一のその後の人生
概要・立ち止まらせたい言葉や表現	**太一の生い立ちと幼いころの夢** 父もその父も、その先ずっと顔も知らない父親たちが住んでいた海に、住む太一。いつか自分も漁師になると夢見ていた。 **父の人物像と死** 大物をしとめても自慢することのなく、不漁の日が続いても動じない村一番のもぐり漁師だった父だが、ある日漁に出たまま帰らず、巨大なクエとロープでつながったまま、水中で事切れていた。 【着目させたい叙述の例】 ・「おとうといっしょに海に出るんだ。」 ・父の会話「海のめぐみだからなあ。」 ・光る緑色の目をしたクエ。	**与吉じいさの教えと人物像** 中学を卒業する年の夏、父が死んだ瀬で一本釣り漁師をしている与吉じいさに無理やり弟子入りした太一。初めは釣り糸もにぎらせてもらえないじいさは、瀬に着くやや釣り針を投げ、五十センチもあるタイをとれるが、「千びきに一びきでいいんだ」と言って、毎日二十びきの魚をとると、道具を片付ける。 【着目させたい叙述の例】 ・父の死んだ瀬に毎日一本づりに行っている ・無理やり弟子になった ・「千びきに一びきでいいんだ。～ずっとこの海で生きていけるよ。」	**太一の成長** 弟子になって何年もたち作業のほとんどをやるようになった太一に、じいさは「おまえは村一番の漁師だよ。」ともらす。船に乗らなくなったじいさのもとに、太一は毎日魚を届ける。 **与吉じいさの死** 真夏のある日、与吉じいさは亡くなっていた。太一はそれを「海に帰りましたか」と受け止め、自然な気持ちで手を合わせる。 【着目させたい叙述の例】 ・「村一番の漁師」「ここはおまえの海だ。」 ・「海に帰りましたか～感謝しております。おかげさまでぼくも海で生きられます。」 ・父がそうであったように、与吉じいさもまた	**母のおそれ** 成長した太一が「おとうの瀬にもぐる」と言い出すことを恐れ、「おそろしくて夜も眠れない」と母は太一に伝える。 **屈強な若者になった太一にとっての海** 漁師として成長し、海を自由な世界と感じるようになっていた太一は、母の心配を知りながらも、とうとう父の瀬にもぐる。一年潜り続ける中で様々なものを見つけるが興味をもてない。 **太一の葛藤と決断** 太一は浮かんでは戻りを繰り返す。大魚は自分に殺されたがっているのか、とられば一人前にはなれないと思うほどだったが、太一は瀬の主を殺さなかった。 【着目させたい叙述の例】 ・母の会話「おまえの心の中が見えるようで」 ・母の悲しみさえも背負おうとしていた ・母が毎日見ている海 　↕太一にとっては自由な世界 ・海の情景描写 ・とうとう父の海にやってきたのだ。	**大魚との遭遇** 父の瀬にもぐり続けたある日、太一はついに父を破ったかもしれない大魚と遭遇する。青い宝石の目をした百五十キロをこえるであろう大魚は、もりを何度向けても動かない。 **太一の葛藤と決断** 太一は浮かんでは戻りを繰り返す。大魚は自分に殺されたがっているのか、とられば一人前にはなれないと思うほどだったが、太一は瀬の主を殺さなかった。 【着目させたい叙述の例】 ・大魚についての描写 　↓「青い宝石の目」など色彩表現、比喩表現 ・太一の心情描写 　↓興奮していながら～冷静だった、自分に殺されたがっている、こんな感情になったのは初めて、えがおをつくった ・本当の一人前の漁師 ・太一の言葉「おとう～また会いにきますから。」「こう思うことによって～瀬の主を殺さないですんだ」 ・海の命だと思った。	**太一と家族のその後** 太一は村一番の漁師であり続け、結婚して元気で優しい子どもを四人育てた。母はおだやかで満ち足りたおばあさんになった。太一は大魚のことを生がいだれにも話さなかった。 【着目させたい叙述の例】 ・母や家族の様子 ・村一番の漁師 ・千びきに一びきしかとらない ・海の命は全く変わらない ・もちろん～生がいだれにも話さなかった。

【学習課題（大きな問い）】物語から見付けた生き方を自分の生き方とつなげて考えよう

問い	太一はどのように成長していったのだろうか	太一は周りの人たちから どのような影響を受けたのだろうか	瀬の主をとらなかったとき、 太一はどのような思いだったのだろうか	太一の生き方について 自分の考えをまとめよう
◆読みの視点　◇整理分析の方法	◆海の描写や海に対する太一の心情の変化を読み取り、太一の成長や変化を捉える。 ・会話　・様子　・出来事　・情景描写 ・心情描写 ◇太一にとって海がどのような場所に変わっていくか、出来事や心情と結びつけながら変化をまとめる。 ・幼いころの海 （父の死の前と死後の比較） ・漁師としての海 （弟子入り直後と数年後とじいさの死の前の比較） ・母にとっての海と太一にとっての海の比較 ・比喩などの表現の工夫と効果 ・クエの様子や描写	◆おとう、じいさ、母の生き方・考え方が太一に与えた影響を考える。 ・会話　・様子　・出来事　・関係 ・二人の死の描写と太一の心情の違い ◇おとうとじいさの共通点や違いを整理したり、三人の太一への影響や関係を図にまとめたりする。 ・おとうとじいさの仕事のちがい ・二人の言葉の比較 ・おとうとじいさの海や命に対する考えの共通点や、二人の死とそのときの太一の思いや向き合い方の違い（変化） 　↓太一の漁師としての成長や変化 ・「村一番の漁師」とは ・四場面と最後の場面の母の比較	◆心情の変化に着目して、瀬の主を取らなかった太一の気持ちを想像し、山場を読み深める。 ・瀬の主に対峙する太一の様子や行動 ・瀬の主の様子や描写 ・父やじいさから受けた影響 ・母の言葉 ◇太一の行動や様子、影響を与えた人物、情景描写などを結びつけながら読んだり、友達と話し合ったりして太一の心情についての考えを深める。 ・じいさの教え「千びきに一びき」の意味と、太一の行動を比べる ・おとうの死と母の言葉をつなげる ・四場面の母と最後の場面の母を比較 ・大魚の描写や海の情景描写 ○もりをおろす太一の葛藤の内容 （せめぎあう感情とは何か）	◆周りの人物との関係や影響、山場の行動や心情から太一が選んだ生き方について考えを深める。 ◇物語全体の成長や山場での選択などを、最後の場面と結びつけて読み、太一の生き方について考えを深める。 ・父や与吉じいさからの影響 　↓そこから得た太一の考え方や信念 ・追い求め続けた大魚をとらなかったときの葛藤と選択 ・最後の場面の太一 　↓どんな漁師になったか ・母や家族との様子 ・主のことを誰にも話さなかった
児童の読みの例	C先祖代々海に住んできて、当たり前に生きていく場所。 C幼いころから、自分は父と漁師になると決めていた。 Cめぐみをもたらす海だが、父の命を奪った海でもある。 C与吉じいさに弟子入りして、初めはまだまだ思い通りにはならない。修業を積み、一人で何でも海で仕事ができるようになり村一番になる。→海が生きる場所になった。 C父やじいさが帰った場所。「海で生きる」とつながる? C屈強な若者に成長した太一にとって海は「自由な世界」と書いてあるから、思い通りに何でもできる場所ということ。 C母にとっては、父を奪い、太一も連れて行ってしまうおそろしい場所でもあったのだと思う。 C水中の美しい描写や「壮大な音楽」などの比喩表現から、父の海は特に特別な場所だった。ずっと目指していた。 C「追い求め」続けたクエがいる場所。 C生きるための仕事は一本づりだから、他に見向きもしない。 C「海の命」は変わらずに守らなければならないもの。 C生涯話さなかったのは、自分の名誉よりも海が大切だから。	C父は村一番のもぐり漁師。与吉じいさは一本づり漁師。弟子入りした太一も一本づり漁師。太一がもぐるのは仕事のためではない。 C太一がじいさに弟子入りしたのは、父の瀬で漁をしたかったからだと思う。父にあこがれ父のようになりたかった。 C父の死んだ瀬で主を見つけて、敵討ちをしたかったのかも。 C大物を仕留めても不漁でも動じない父と毎日二十びきだけで欲張らない与吉じいさは海のめぐみに感謝している。 C与吉じいさの「千びきに一びき」の教えの影響は大きい。太一は最後まで守り続けている。じいさを尊敬し感謝している。 C海を守ろうとしていて、それが「海で生きる」ということ。 C与吉じいさが死んだときは穏やかな太一だが、「今は」ということは父のときは受け入れられなかったのだと思う。漁師として成長したから受け止められた。 C父とじいさでは亡くなり方がちがう。父の死は突然だし、瀬の主にやられた、と感じた。だから敵をうつ。 C「母の悲しみまでも」とは、母を悲しませると分かっても海に潜るということか。でも、最後の場面では母は幸せになっている。	C太一は父を殺した大魚を殺して父を超えたいと思っていた C父の敵を討とうとしていたけれど、動じないところがおとうに似ていて、おとうの生まれ変わりだと思ってやめた。 Cおとうを破ったのだから、生まれ変わりというのはおかしい。 C「こう思うことによって」だから本当に父だと思ったわけではない。 C「殺さずにすんだ」という表現、「○○せずにすむ」というのは、やってはいけないことだと思ったから?やりたくなかったから? C何度も浮上し戻ることを繰り返していて、相当な迷いを感じる。 C父の敵をうちたい、父を超えたい、一人前の漁師になりたいという「大魚をとりたい気持ち」があった太一を止めたのは何だろう。 C瀬の主は神秘的に描かれている。主は守り神的存在「海の命」 Cそうではなく父の敵である主も「特別ではなく海の命の一部」と思えたのでは。最後「海の命は全く変わらない」とあるから。 C「海の命だと思えた」というのは大魚も自分が守るべき存在だと思おうとしたのではないか。海を守る「千びきに一びき」という与吉じいさの教えにもつながる。 C大魚を打つことは、一本釣り漁師である太一の仕事ではない。 Cずっと追い求めていた大魚をとらないことは辛い決断だと思うが、太一は笑った。 ここで太一は自分の生き方を決めたのだと思う。 C四場面で母を悲しませると分かっても海に潜った太一だったが、父と同じ道は選ばなかった	C瀬の主を殺さなかった太一は、一人前の漁師になれなかったのでは。 Cいや、瀬の主を生かし、海の命を大切にして海で生きようとする太一こそ、本当の一人前の漁師だと思う。自分も太一のように信念を貫きたい。 C父は大魚を殺そうとして死んで母を悲しませた。逆の決断をした太一は父を超えたと思う。 C父を超えたいという自分の感情をおさえて、殺すべきではない瀬の主を生かした太一は、海に生き、海を大切にする漁師になれた。時には夢を手放すことが大切なこともあり、それで成長することもあるのだと知った。 C太一は自分の勝手な思いよりも、与吉じいさの教えを守って生きることを選んだ。それは父の生き方にも当てはまる。海に生き、海に帰ったじいさやおとうや先祖と同じように生きることを選んだ。そんな太一を尊敬する。 C太一は海や家族を守る漁師になることを選んだ。だから母は最後の場面で幸せになっているのではないか。太一の子どもたちも幸せだと思う。 C欲張らずに自分の仕事をしたり、瀬の主のことを生涯話さなかったりしているから、海の命が変わらないように漁師として一生守ろうとしていると思う。